

## 東京の最高峰・雲取山の野鳥たちの近況

田畑伊織（奥多摩植物誌調査プロジェクト／かもしかの会東京）

雲取山は東京都の最西端に位置する、長野県から続く奥秩父主脈（関東山地）最東端の2000m峰、都内最高峰の山（標高2017m）である。山頂付近の年間平均気温は5℃を下回り、亜高山帯の植生が分布している。これに伊豆・小笠原の島々が加わることで、東京都は亜寒帯から亜熱帯までの気候帯を持つ国内唯一の地方自治体となっている。小面積ながら東京都にとっては貴重な環境であり、核心部となる雲取山頂部北面は三頭山と並んで、秩父多摩甲斐国立公園の特別保護地区に指定されている。



空から見た雲取山山頂

### 「繁殖期2022」調査の結果

これらの地域に足を運び、豊かな植物相・動物相を目にすることは、都民にとって大きな喜びと楽しみである。筆者も2000年代後半からはほぼ毎月雲取山を訪ねている。そのこともあってか、研究部からお声掛けをいただき、当地域の「繁殖期2022」調査を担当させていただくこととなった。これまで雲取山で毎回鳥類の、特に定量的な調査をしてきたわけではなかったのだが、2019年に東京都本土部レッドリスト2020改定作業で、鳥類専門部会委員の御手洗望氏と本地域を調査した際気がかりなことがあり、それを再度確かめたいこともあって携わらせていただいた。

例年、夏鳥が出揃うのはホトトギスの到着を待って5月の中下旬となる。天候などの都合により昨年は5月18日と6月8日の調査実施となった。コースは雲取山北面の通称「大ダワ」から雲取山の巻道を通り小雲取山までのおよそ3km弱。コメツガを主にシラビソやネコシデを交えた森の中、苔に覆われた林床を彩るバイカオウレンがオサバグサに移り変わる、そんな時期であった。



山頂付近の植生

結果、両日とも20数種、成鳥数130羽前後が記録されたが、都内他調査地と比べてこの数はいかがだろう。雲取周辺で良く耳にするヒガラ・ルリビタキはそれぞれ成鳥数20羽前後、ミソサザイは思ったより少なく10羽前後、5月はクイタダキが、6月はメボソムシクイが意外に多くそれぞれ15羽前後であった。6月しか記録されなかったのはホトトギスやジウイチなどの杜鵑類やコルリなど、渡来の遅い鳥種ということでここまでは納得なのだが、5月しか記録されなかったのはオオアカゲラやアカゲラ、アオゲラなど中型のキツツキ類やツツドリで、これはなぜ…？

いずれも1日ずつの調査であり、分析・考察には心許ない。奥多摩支部では定期的に雲取山で探鳥会を開催されていたと思うが、その記録と比べていかがだろうか。

また、「気がかり」と前述したのはクロジの不在である。かつては石尾根から雲取山を経て長沢背陵まで、多くはないが点々と聞こえてきていたのどかな囀りが2010年代の中頃以降、全く耳にできなくなってしまった。今回も記録することができなかった。加えて今回、ビンズイの記録が思ったより多く、巣が近いと思われる場所から慌てて飛び立つ個体も見られた。石尾根側の防火帯のカヤトでは珍しくないが、調査コースはほぼ樹林内であ

る。いずれもササ(スズタケ)の一斉開花による枯死や、個体数密度が増加しているシカの食圧による林床植生の劣化、それに加え昨今の極端な気象状況による地形の改変などが原因として考えられるが、詳しくはまたの機会に。

### 「繁殖期2023」調査での速報

「繁殖期2023」調査の1回目を5月18日に実施した。記録した鳥は16種92羽で、昨年同様、ヒガラルリビタキが多く、夏鳥のツツドリ・ジュウイチ・エゾムシクイ・メボソムシクイの声も聞こえた。また、餌運びをしているとおぼしきオオアカゲラも1羽認めた。

ただ調査開始前、雲取山荘の玄関を出た時から、なんとなく鳥の声が少ないような気がしていた。結果、やはり種数・羽数とも前年より7~8割減と少なく、6月の結果がどうなるか、これまた気がかりである。

最後に本調査のお声かけをいただいた研究部、また現地調査でお世話になった雲取山荘及び環境省奥多摩自然保護官事務所のみなさまに感謝の意を記し、本稿を終えたい。 [たばた・いおり]

## 『東京都レッドデータブック2023・本土部』が発行されました

10年ごとに見直しがされている「レッドリスト」(絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)の解説書が「レッドデータブック」です。その最新版『東京都レッドデータブック2023・本土部』が発行されました。A4判・879ページ・オールカラーの大作です。

レッドリストの掲載種は植物から貝類まで1845種。1998年度は1303種、2010年度は1579種でしたので、年々増え続けています。その中で鳥類は見直しで10種減り・10種増えて162種と数は2013年度版と同じです。前回のレッドデータブックとの大きな違いは、全種に分布地図が載せられていること。また、鳥類では区部・北多摩・南多摩・西多摩ごとの評価のほか**「本土部」**という項目がつけられ、本土部全体ではという評価が加わったことです。選定・評価は都の検討会が行い、その下に「専門部会」が設置され、鳥類部会は、金井 裕(座長)・植田睦之・川内 博・御手洗 望(委員)の各氏で構成されました。

ところで、このレッドデータブックの作製にあたっては、写真提供の依頼があり、会員の方の写真がたくさん使われています。研究部関係の方だけでも、井上裕由・川内 博・鈴木弘行・土橋信夫・仲野 遵・三間久豊・吉田 巧の各氏の作品です。なかには『ユリカモメ』の表紙写真を飾ったものもあります。できるだけ都内で撮影されたものが選ばれましたが、遠くは長崎県のものもありました。 [研究部]

[この本は、都庁第一庁舎3階の「都民情報ルーム」で入手できます(1冊5,156円)。

ただし重量が2.5kgあります。ネット環境が使える方は「ネット版」が利用できます。]

